

フリーランスとライフキャリア

— フリーアナウンサーを事例として —

Freelance and Life Career : A Case Study of a Freelance Announcer

北出 真紀恵

Makie KITADE

キーワード：フリーランス、アナウンサー、ライフストーリー、ライフキャリア

Key words : freelance, announcer, life-story, life-career

要約

近年、フリーランスの労働に関する問題が浮上している。

アナウンサーは、放送メディア産業を代表する職業であるが、その多くは、放送局に正規雇用されるアナウンサーとは限らず、無名のフリーアナウンサーである。

本稿は、フリーランスとアナウンサーをめぐる言説を整理することから始める。次いで、フリーアナウンサーの個人史に焦点をあて、ライフキャリアの観点から「放送の話者」としてのキャリアを蓄積する意味を考えてみたい。ひとりの女性アナウンサーのライフストーリー・インタビューから見てきたのは、フリーランスとして、従属せず、自らのスキルを磨き、常に成長しようとする自律した姿であった。フリーランスの女性がたどってきたキャリアは、ワークライフバランス時代におけるメインストリームとなりうる可能性をもち、これからのキャリアのありようを先取りしているといえる。

Abstract

Nowadays the problems of non fulltime workers are frequently discussed.

Announcers represent the public image of mass media industry, and many of them are unknown free lancers. At first I will study the discourses on freelance and announcers. This paper aims to investigate the meaning of one's career in the light of life-career by focusing on describing a personal life-story of a freelance announcer. From an interview of a freelance announcer, she is an independent actor that improves her skill and tries to be mature, not to be subordinate to her clients.

The result of this study shows that the career of female free lancers can be within the main stream in the age of work life balance, and their working style is a forerunner of

the life style in which people build their career.

1 はじめに

近年、フリーランスの労働に関する問題が浮上している。非正規雇用者の増大が社会問題とされ、メディアがとりあげるようになって久しい。しかし、非正規雇用者問題を伝えるメディア産業自体が多く非正規雇用者を抱えた上でなりたっていることもまた事実である¹⁾。

アナウンサーが放送メディア産業を代表する職業であることはいうまでもない。放送メディアの最前線にたつアナウンサーには常に注目が集まり、番組編成の多様化にともない、アナウンサーに求められる職域は広がる一方である。

アナウンサーは、経験を積み、一定のスキルを身につければ、フリーランスとしても「しゃべり一本」でやっていけるスペシャリスト専門職である。アナウンサーたち自身が、会社に所属はしていても「個人事業主」のような仕事だと述べているように²⁾、彼らは正規職員だからといって仕事があるとは限らない、市場原理にさらされる「個」の存在である。アナウンサーという職業は、常にエンプロイアビリティ（個人の雇用される能力）が問われているのである。

フリーアナウンサーといえ、局アナ時代に人気を博し、独立後、有名テレビ司会者として成功する中高年の男性アナウンサーや、首都圏のテレビ局独立後、タレント活動をする若い女性アナウンサーをイメージしがちだが、放送産業は、多くの有名・無名のフリーアナウンサーによって支えられている。

本稿で光を当てるのは全国的に有名なフリーアナウンサーではなく、無名のフリーアナウンサーたちである。特に女性アナウンサーは、女性アナウンサーの非正規化の増加という問題をさしひいたとしてもフリーランスなくしては成立しない。

本稿では、フリーランスとアナウンサーをめぐる言説を整理することから始め（2節）、次いで、ひとりのフリーアナウンサーの個人史に焦点をあてることによって、スペシャリストとしてのスキルをどのように蓄積したか、特にライフキャリアの観点から「放送の話者」としてのキャリアを蓄積する意味を考えてみたい（3節）。

筆者は、関西地方で30年以上の職業キャリアをもつフリーアナウンサーのAさんにインタビュー調査を行い、そのキャリア形成とライフキャリアの観点からフリーアナウンサーという職業について語ってもらう機会を得た。

結論を先取りすれば、Aさんのライフストーリー³⁾から見てきたのは、フリーランスとして自らのスキルを磨き、常に成長しようとする姿である。また、人生において積み重ねた経験を放送メディアでの「語り」に生かすライフキャリアであった。

最後に、フリーランスとして努力を重ね、スペシャリストとして経験を積んできたことと、フリーランスという時間的に柔軟な働き方ができる労働形態だからこそ実現するライフキャリア形

成の可能性と、現在、メディア産業が置かれている状況から鑑みるフリーアナウンサーの課題について、Aさんのライフストーリー・インタビューに依拠しつつ、述べることにしたい。

2 フリーランスとアナウンサー

本節ではまず、“フリーランス”という言葉に焦点をあて、フリーランスをめぐる言説を整理する。

そもそもフリーランスとは、どの軍隊にも所属しない自由な騎士を意味している。フリーランスの語源は「自由な槍」であり、中世の傭騎兵のことを指していた。彼らは忠誠心や主従関係に囚われない自由な騎士であり、報酬や戦の意義を受け入れることができれば、どの君主の下でも戦った。

その後、フリーランスという用語は、特定の企業に所属せずとその都度契約を結びながら働く個人に広く使用されるようになった。現在では、とりわけ文化的専門職、つまり、ジャーナリスト、ライター、グラフィックデザイナー、エディター、ウェブデザイナー、ソフトウェアプログラマーなどといった仕事に多くみられる傾向にある。

2-1 フリーランスをめぐる言説

宇田忠司(2009)は、フリーランスをめぐる言説の勃興の背景として、福祉国家体制の終焉から新自由主義の台頭と並行してたちあらわれた自営業者の増大をあげ、フリーランスの増大と、その社会的影響力の大きさからフリーランスをめぐる言説が紡がれ始めた⁴⁾と述べている。宇田によれば、フリーランスをめぐる言説は(1)騎士言説(2)従僕言説(3)英雄言説の3つがある。

宇田によるそれぞれの言説の説明をみていくことにしよう。

(1) 騎士言説

フリーランスを巡る言説の中でも、自由や自律といった側面が強調され、独立独歩の自由騎士を想起させる言説である。フリーランスは自らの知識や技能を基に柔軟性に富む働き方を体現する存在として描かれる傾向にある。主として伝統的な企業内雇用における抑圧や不条理といった負の側面が声高に喧伝される一方、耳当たりの良い新たな概念の提示を通じて、企業から独立し、自律的に働く個人が自由と自己責任の時代を象徴する人物として賛美されている。

(2) 従僕言説

騎士言説と対照的に、服従や隷属といった側面が強調され、社会的弱者あるいは従属者を想起させる言説である。特定の企業に所属せずに働く個人は周辺または非正規労働者として捉えられ、企業(とりわけ大企業)の中核または正規従業員と対置され、また、企業から押し出された(従業員として雇用されるに値する知識や技能を持たない)社会的弱者(搾取されるもの)として描かれる傾向にある。彼らの増大は社会的に憂慮すべき事態として捉えられる。

(3) 英雄伝説

自由や自律を強調する騎士言説に変革や創造といった側面が加えられ、革新的な開拓者・先導者を想起させる言説として近年台頭してきた言説である。自由で自律的な個人が、クリエイティビティを発揮しながら眼前の問題解決や閉塞状況の打破を成し遂げ、産業や社会に革新をもたらす存在として称揚されている。

以下、宇田の整理に若干の検討を加えてみたい。

(1) 騎士言説と(3) 英雄言説は、フリーランスのポジティブな側面である。自らの職能を武器に独立し、自由と自己責任において、柔軟性に富む働き方を選択できる専門性を持った人物は、これまでの組織人間のオルタナティブとして描かれている。このような労働者像は90年代半ばから登場した、労働者の自助努力や自己責任を強調し、エンプロイアビリティを身につけるべきだという主張とひびきあうものである。自由で自律的であり、創造性を発揮できる「騎士」たちの存在は、産業や社会に革新をもたらす「英雄」になりうる可能性もあるという意味で、「英雄」言説は「騎士」のバリエーションとして含み込んだ方がよいであろう。

一方、フリーランスの労働のネガティブな側面が問題視されているのは(2)の従僕言説である。メディア産業は構造的不況にあり、制作費を下げることで利益確保をはかり、その結果、フリーランスにしわ寄せがきている。出版業界をはじめとし、映像制作の現場も深刻な労働状況にあるといわれているが、ここでは、フリーランスにおける従僕言説は、現在、社会問題となっている「非正規雇用者問題」と位相を異にする点に留意しておきたい。フリーランスが「非正規」であるというのは語義的には正しい。しかし、社会問題化している「非正規雇用者問題」とは、その劣悪な労働条件と同時に、技能を蓄積する機会から排除されていることが大きい。フリーランスとは、何らかの専門的スキルを持った労働者であることが前提だと考えるべきであり、何のスキルもなく単純労働に非正規に従事する労働者は「非正規労働者」であってもフリーランスとはいわないのではないか。この点は注意が必要である。本稿で焦点化するの、あくまでも一定の専門的スキルを持った労働者—フリーランスであることを確認したい。

繰り返すが、メディア産業のフリーランス労働問題とは、熟練技能があるにもかかわらず、非正規であるがゆえに労働条件が悪化していることにある。

メディア産業の下請け会社のスタッフやフリーランスの収入は総じて正規職員のそれより低く、不安定であるのが現状である。また、世界規模でマスメディア産業の業績不振の結果、実際にフリーランスの労働者が増加している。

欧州においては、90年代半ばから文化的専門職において企業内の従属的労働からフリーランス労働への移行がみられ、自営業が増大している。

林香里(2008)は、欧州において台頭している「自営労働」という新しいカテゴリーに分類される働き方を紹介しつつ、フリーランスの仕事を「自営労働」として可視化し、エンパワーメン

トを支援していくことの重要性を説いている。「自営労働」とは、就業するにはすでに専門分野のスキルを習得しており、雇用関係は「雇用者－被雇用者」ではなく「発注者－受注者」の関係に近いという。

林（2008）が述べるように、文化的領域の活性化のためには、こうした問題を顕在化させ、社会全体で痛みを分け合う仕組みが待たれる次第である⁵⁾。

2-2 アナウンサーの技量

次に、アナウンサーをめぐる言説について整理しておきたい。

かつて、アナウンサーの役割は正しい日本語－共通語の伝え手であった。現在は、正しい日本語の伝え手であることはもちろんであるが、その機能は多岐にわたり、アナウンサー像があまりにも多様化しており、その役割をモデル化できず、曖昧であることが問題視されている⁶⁾。

藤田真文（2009）は、アナウンサーの役割モデルを再構築すべきだとし、2つの役割モデルを提出している。その1つは言葉によって人々に何かを「告げる人」であり、もう1つは言葉によって番組を成立させる「仕切る人」である。

藤田によれば、1つ目の「告げる人」とは、原点である言葉のプロであることであり、その技能とは、正しい言葉使いでニュースを読むことができることであり、その延長線上のスキルとしてナレーションをあげている。そして2つ目の「仕切る人」は、番組の進行役・司会者役割のことである。この役割は、番組を成立させる責任を担い、言葉の力で番組を仕切っていくことが求められる。また、番組を仕切るなかでのインタビューというジャンルは、アナウンサーの「聞く」能力の差が出る領域である。アナウンサーがこうしたスキルを会得するには経験が必要であり、技能を高めるためには長い年月も必要とされる。（藤田、2009）

フリーアナウンサーには、一定の期間、正規雇用社員として経験を積んだ元局アナと、最初からフリーランスとしてキャリアをスタートさせる人の2種類が存在する。

そもそも、アナウンサーという職業は、そこに女性差別やジェンダーを内包していたにせよ、女性に開かれた職業であった⁷⁾。現在でも数千人の応募者からわずかの内定者という難関である。しかも、女性の志望者は男性志望者の4、5倍といわれている。アナウンサーが女性にとって特別な職業であることはまちがいない。なぜなら、給与面や仕事内容による性差が少なく、スキルさえ身につければフリーランスとして長く活躍できる可能性があると考えられているからである。

女性たちが出産や子育て期、介護期などケアの必要な家族のために離職する事例は枚挙にいとまがない。長時間にわたって拘束されるフルタイム労働は不可能であるとしても、短時間労働ならば、仕事の継続は可能である。また、一時期、離職していたとしても、需要さえあれば復帰も可能である。誤解を恐れずに言えば、スキルの高いパートタイム労働は、一般的な女性のライフコースからいえば理想的であるともいえる。そのような意味で、伝統的近代家族的体制がうまく機能

しているなかでは、アナウンサーの非正規化は、放送局側の経営の合理化の思惑と女性たちの希望とが、不幸にも合致してきたといえるのではないだろうか。

3 フリーアナウンサー A さんの事例から

フリーアナウンサーが仕事を獲得する手段は、一般的にはオーディションである。書類審査や簡単な面接に始まり、本番さながらのテストが課される場合もある。ところで、そこで試される専門的スキルの習得はどこで行うのであろうか。

基礎的技能研修の多くはアナウンサー養成のためのスクールで行われ、また、フリーアナウンサーを派遣する多くのプロダクションでは、アナウンス技能の研修も行っている。かつては、番組出演者の一般公募をする場合もあったが、最近では、ほとんどの場合がプロダクション経由である。まったく技能研修を受けたことのない者が突然採用されることは、現在ではないに等しい。

関西地方では、多くのフリーアナウンサーが活躍している。準キー局をはじめとし、放送局数および番組制作数は首都圏に次ぐ規模である。加えて在阪局における女性アナウンサー（女性正規職員）の採用は男女雇用機会均等法施行以降（1987年度採用以降）である。それ以前には放送創業期を除いては女性社員が存在せず、女性のアナウンス業務はすべてフリーランスという外部労働に委ねられてきた。

本節では、フリーアナウンサーの世界を詳細に記述するなかで、フリーランスの多面的な実践に接近することを試みたい。筆者のインタビューに応じてくれたのは、関西地方で活躍するフリーアナウンサーの A さん（53 歳）である。

以下では、インタビューにおいて A さんが語った言葉を引用するが、その記述において【 】は筆者による注釈、[] は内容を理解しやすくするための筆者による補足を意味する。

A さんは、放送局に勤務するアナウンサー（正規雇用職員）と比べて、自らのキャリア形成を次のように例えている。

局アナとか、積み木はたてにつみあがっていくんだけど、フリーのアナウンサーは積み木を横にしか並べられない。私は、積み上がっていかない。

私、個人経営で社長⁸⁾。(笑)

「私、個人経営で社長」という言葉は、第 2 節で紹介した、まさに A さん自身が「自営労働」であることを自認していることのあらわれである。非正規雇用者というアイデンティティではなく、「個人経営」というところに自らを放送局と契約を結ぶ「自営」業者の顔がのぞく。

「たてにつみあがっていく積み木」とは、放送局という会社組織にあって昇格していくコースをさしている。組織人である以上、アナウンサーという専門職であっても、管理職になれば現場

を離れざるをえない。管理職になる前に、フリーランスになる局アナがいるのはこのためである。組織人としてのキャリアを積みばデスクワークも増え、放送の現場から遠ざかることは避けられない。組織人としてのいわゆる“出世”よりも、技能に自信のある人は“生涯一アナウンサー”であることを選ぶ傾向がある。

3-1 フリーランスからの出発

Aさんが放送の仕事を開始したのは大学3年生の1月である。3年生の4月から通っていたTTCテレビタレントセンターの研修中、オーディションに合格した。最初の仕事はテレビのレポーターであった。

TTCは、テレビ放送の草創期に不足するテレビタレントを養成するために吉田秀雄により創立された社団法人であり、1958年に東京教室、1959年に大阪教室、1962年に名古屋教室が開校した。それぞれ大手広告代理店と在京・在阪・在名の放送局が運営にあたり、講師陣は各局のアナウンサーやディレクターが担当した。当時、TTCは放送の仕事への回路であった。大学の放送部員であったAさんは、アナウンスの指導にきていた民放局アナウンサーに入学をすすめられ、TTCのオーディションを受ける。

当時、TTCって、信じられないんだけど、すごい人気があったのよ。100人受けて〔合格者が〕25人。うちの期って、ものすごい人が多くて、地方局で局アナしてたけど、大阪で働きたいってやめて来た人とか、劇団でずっと勉強してた人とか、25人のうち勉強したことない人は5人。本当は1年半勉強して、大学の4年の秋からオーディション受けるのに、3年生の1月に先輩方がオーディション受けに行くのに一緒に行ったら、ってマネージャーに言われて行ったら、〔オーディションに〕通っちゃった。

TTCの授業は社会人でも通えるように夜間に開講されていた⁹⁾。オーディションに合格したものは、月曜日から金曜日までの毎日、放送メディアの出演者としての知識と技能を学び、1年半の研修期間を経てテレビタレントビューローという事務所に所属し、各局の番組オーディションに臨む。大阪教室の場合、大手広告代理店の常駐アナウンサーの契約や在大阪局のアナウンサー室への出向、また、広島放送局への契約アナウンサー出向をも担っていた。関西地方においては、男女雇用機会均等法施行前は女性社員の採用が実施されていなかったが、女性アナウンサーの需要は常に存在し、その供給をセンターが担っていた。外部機関であったが、放送および広告業界が協力することによって、必要とされたアナウンサーの教育・研修を担っていたといえる。

3-2 フリーランスとキャリア形成

Aさんはテレビレポーターの仕事の皮切りに次々とフリーアナウンサーとしてのキャリアを形成していく。その軌跡を振り返ってもらった。

就職、考えた。[当時の就職活動スタート時期の] 大学4年生の秋。3本テレビのレギュラーがあったの。けっこういい金額になってて、どうしようかな、と思ったけど。[タレント（フリーアナウンサーとしての）活動については] 親が反対で。ちゃんとした就職をしてくれ、そんな浮き草稼業あかん。父親にこんこんといわれて。やりたいんやったらやってもいいけど、まともな結婚はできると思うな。(中略) そのままやってみようって。卒業して、その春にラジオ [のレギュラー] がついて。だから、卒業して3年ぐらい仕事に困ったことがない。

Aさんがフリーアナウンサーとしてキャリアをスタートさせたのは1970年代の後半である。もともと新聞記者など書く仕事にあこがれていたAさんであるが、放送部に指導に来ていた民放のアナウンサーにすすめられたというだけあって、素質があったのであろう。在学中にオーディションに合格し、放送業界に飛び込むことになる。しかし、当然のことながら大学を卒業する時期になって、自らの職業選択を迫られることになる。「フリーランス」という就業形態も一般的ではなく、女性のライフコースとして就業を継続することも一般的ではなく、「結婚し、専業主婦となること」が女性の幸福とされた時代である。しかしながら、当時、4年制大学卒業の女子の就職は限られており、多くの民間企業の採用からは排除されていた。

そや、私、局アナも受けようと思って。[受けなかったんですか?] なかった。4年卒女子 [就職戦線] どしゃぶり。女性の普通の仕事は、商社なんかは短大じゃないとだめ。あるとしたら、流通関係が4年卒を採り始めた。

あるいは航空関係のステューワーデス [キャビンアテンダント]。それぐらい。局アナ [の募集] は北海道と高知。2局だけ。高知は親戚か県内に身元引受人ないとだめ。唯一北海道だけ。フリーでも順調に局アナ以上にギャラをもらってたし、それが明日なくなることは気がつかず。(笑)

Aさんは積極的に「フリーランス」を積極的に選択したのではない。キャリアのスタートはすこぶる順調であったが、「フリーランス」は消極的に選択したのであった。非正規雇用であることに不安は抱かなかっただろうか。

26, 7かな。なんか肩書きがない、っていうのが不安だった。タレントとか、フリーとか。

名刺渡す時に所属がない、タレントといわれることに抵抗がある。昔は「自分の職業を」フリーアナウンサーっていったよね。でもアナウンサーほど確実な仕事ができない。今でもタレントっていうのは抵抗がある。タレントって特殊技能、有名で、「私は」言う程メディアで有名じゃないし。CM やってるわけでもないし。

Aさんの迷いはフリーランス—非正規雇用ゆえの従僕言説の側面である。収入の不安定さは生きることの不安につながる。また、放送局に正規雇用されていないので、アナウンサーのような仕事をしてはいるが、アナウンサーとしての自認もできず、職業アイデンティティの迷いも見受けられる。ちなみに放送局において「局アナ」ではない出演者はアナウンサーのような役割でも「タレント」と区分される。またAさんの「アナウンサーほど確実な仕事ができない」という言葉にはアナウンスメントにおける基礎的技能に対する自信のなさを見る事ができる。そこには「アナウンサーは、正しい日本語（共通語）の使い手である。」という前提が存在する。

でもね、みんながしてることだけど、すごい勉強はしたの。ヤンリク【「ABC ヤングリクエスト」当時の人気ラジオ番組のひとつ】やってるとき、すごい劣等生だったから、アクセントめっちゃめっちゃだったし。テレビはそれで通ってたからね。よく言われたのは、かわいいだけで仕事できると思うなや。テレビはそれで通るけど、ラジオはとおらんで。家帰ったら毎日、新聞声出してよんで、地道に切り抜き作ったり、本読んだり。

テレビというメディアからスタートしたAさんの職業キャリアであるが、ラジオの現場を経験するやいなや「劣等生」となる。問題とされたのは共通語のアクセントであった。テレビに比してラジオはアナウンスメントの情報量が多く、放送の話者の技能が試される。当然のことではあるが、Aさんは努力に努力を重ねた。彼女がこだわりをみせたのは、共通語の会得と「よみ」のスキル、そして「どのような言葉を選び、何をどのように語るか」である。1970年代のラジオはモノ（企画）から人（パーソナリティ）へとその内容を変換させた。話者たちはその職能が「共通語」から「フリートーク」へと変容を迫られることとなった。もちろん、最低限の「共通語」スキルは必要条件であるが、それが十全条件ではなくなっていく。

女性アナウンサーの評価は、男性パーソナリティやゲストや聴取者とのコミュニケーションをどのようにはかれるかということがポイントになってくる。

筆者は、1999年に女性ラジオパーソナリティに対する質的調査を行い、現状では女性パーソナリティが担う役割は妻や娘といった女性役割であり、それらは近代家族の擬制であると分析した。そして、ジェンダーの慣習から免れえないことに留保しながらも、主に女性パーソナリティが担った「聞く」「つなぐ」職能こそが双方向メディア時代のメディアコミュニケーターとして十全に

発揮できるのではないかと結論づけた¹⁰⁾。

ちなみに、全国的にみても、現在でも女性フリーアナウンサーの長期的な活躍の場としては、音声メディアとしてのラジオがあげられている。

がんばって生き残りや、っていわれた。私みたいなしゃべり手は関西では生き残らないって。たぶん、おもしろとかじゃないから。【関西では、漫才師や新喜劇の俳優などお笑いのタレント層が厚く、放送メディアの司会進行やレポートなど器用にこなすタレントが多い。】いわゆる正統派として生き残るのは、難しいけど、がんばりやって。同じタイプがいなかった。

女性アナがいらないし、局アナの仕事に限りなく近い、私の場合ね。

放送局の正規雇用アナウンサーではないが、アナウンサーが担うべき役割、それがAさんに期待された役割であった。

それでは、Aさんにとって放送メディアで「話す」ことの専門性とはどういうことなのであろうか。

[空気を読んで仕切る仕事] 向いているみたい。その場の空気を読みながらする仕事というか。正しくコマーシャルをよみなさいと言われてたらできないけど。同期でももっと上手な人はいっぱいいた。声もきれいでアクセントも正しくて。でもそれだけじゃないのよね。

放送の草創期におけるアナウンサーは声の質とアクセントが問われた。しかし、アナウンサーに寄せられる期待は時代とともに変遷する。

藤田(2009)はアナウンサーの役割をことばによって「告げる」ことと、ことばによって番組を「仕切る」ことであるとしたが、まさにAさんは2つ目の「仕切る」技能を経験によって熟練させていったのである。もちろん「告げる」ことはアナウンサーの原点であるが、現在のアナウンサーはそれだけで評価されることはなく、「仕切る」ことができるかどうかの評価の分かれ目であるといっても過言ではない。また、70年代以降のラジオはフリートーク時代へと突入し、番組司会者はパーソナリティと呼ばれるようになった。そのコミュニケーション空間における女性アナウンサーの役割は、メイン司会者である男性パーソナリティの相手役となり、空気をよんで対応する「聞き役」である。そして、聴取者とスタジオをつなぐメディエーターとしての役割を担う¹¹⁾。

しかしながら、この「仕切る」「聞く」「つなぐ」技能は経験以外に会得の手段がない。もちろん生来の素質も関係がないとはいえないが、知識と経験なしには獲得しえない技能なのだ。

3-3 ライフキャリアという視点

アナウンサーとしてのキャリア形成は現場主義である。生放送という筋書きのない舞台は一回一回が違う。そうした現場を数多く踏み、ひとつひとつの現場を丁寧に務め、自ら課題を設定し、それを達成し、乗り越えていく以外に技能を熟練させる術はない。一方で、メディアに出演するということは、アナウンスメントの技能のみを披露することではない。生放送というコミュニケーション空間のなかで、ゲストにインタビューを行い、共演者や聴取者のメッセージにその場で反応しなければならない。ラジオ番組のパーソナリティという仕事は「アナウンス技術」だけではなく、「個人として能動的に語る」ことが要求される。つまり、生身の「個人」が問われるのだ。現代のアナウンサーとは、正規・非正規を問わず、エンプロイアビリティが要求される職業である。

そもそも、キャリアという言葉は、男性の仕事上の経験や課題、職業経歴やその変化が中心に語られてきた。女性のキャリアに関しても、男性のキャリアモデルを念頭に、主に職業キャリアについての説明がなされがちである。

キャリアアップが昇進や昇格を果たすことを意味することからも明らかなようにキャリアという言葉が「出世」「上昇」「成功」「エリート」などの意味を内包していることがわかる。

近年、このキャリア概念の枠組みに大きな変化がみられるようになった。

青島祐子（2009）は、キャリア概念の枠組みに2つの大きな変化があると述べている。第1の変化とは、キャリア概念の適用される範囲が拡大したことにあり、「職業や職務、有給の組織内での仕事に限定されるわけではなく、個人の人生と深く関わる『人の生き方そのもの』であるという捉え方が主流となってきたことである。また、従来の職業キャリアを「ワークキャリア」と呼ぶのに対し、「人生・生き方・個人の生活」全般を視野に入れた広義のキャリアを意味する「ライフキャリア」が使われるようになってきている。そして、第2の変化として、青島は、キャリアは会社や組織が主導するものではなく、本来的に個人が主体になる概念であるとの認識が高まってきたことをあげている（青島、2009）。

1990年代から雇用の流動化・雇用の多様化が急速に発展し、個人は自律的キャリア形成へと方向転換を迫られている。正規雇用者であれ、労働者の自己責任に帰するエンプロイアビリティへの要求は、そうした文脈上にある。

青島は、男性が社会的評価の高い職業に就くことや、収入の増加、組織の中での昇進など狭義の「ワークキャリア」の成功をめざす傾向が強いのに対して、女性にとっての望ましいキャリアとは、ワークライフバランス（仕事と生活の調和）や自己実現など個人の視点にウェイトが置かれる傾向にあることを指摘し、こうした女性のキャリア観は、企業社会の組織の倫理に基づくキャリア観とはなじみにくく、それが、女性労働を周縁的な存在にとどめる一因になってきたのは否めないとしながらも、女性の充実した職業生活への期待や能力発揮、自己実現の意欲はより強まっ

ているという。(青島, 2004) さらに, 女性にみられるキャリア観の特徴は, 若い世代に共通する傾向でもあり, 若年のキャリアに関する考え方が男女を問わず仕事も家庭も視野に入れたものへとシフトしている状況からすれば(青島, 2007), 上記のような女性のキャリア観はこれからのキャリアのありかたを先取りするものであり, ワークライフバランス時代におけるキャリアのメインストリームとなる可能性があるのではないかと述べている。

A さんには30年以上の職業キャリアがあるが, ライフコース上の個人的なイベントとしては結婚があげられる。45歳の時であった。

結婚したら, まるくなった。[と, いわれる。] 介護している人からお葉書きでも「がんばってくださいね」じゃなく「お互いがんばりましょうね」になる。生活実感。ラジオって生活切り売りしているみたいなどころある。上手に切り売りする [ことが大事]。[本音を言って] あ, ごめんなさい, いいすぎましたって。

高齢の義母との同居が始まって2年。ホームヘルパーが来てくれる時間を気かけながら日常を送っている。食事は毎日, A さんが夫婦の分と義母の分を分けて用意している。

私たちの今の悩みは, [義母が] 寝たきりになったらどうしよう。【仕事を続けていくためには】人 [ヘルパー] の手を借りて。特に私なんか, オンエアと取材でよく働いて週4日。夜は帰って来られる。ヘルパーさんに毎日来てもらう。そのあたりは, どちらかが家にいられるように組める。収入さえ保証されれば, こんないい仕事はないわね。

A さんは義母の介護や家事をこなしながら, そうした経験をラジオでの発言に活かしつつキャリアを積み重ねている。収入はレギュラー番組がなくなったことがないとはいえ, 不安定であることに変わりはない。一回ごとの出演料の積み重ねであるため, 年収はその年の担当番組数などによってばらつきがある。2008年には制作費削減の影響を受け, 出演料が3割削減されたという¹²⁾。

しかし, A さんにとっては, 収入も大事だが, 収入のためだけに放送の仕事をしているのではないことが見てとれる。それはワークライフバランスと自己実現を図ろうとする典型的なキャリア観である。

それでは, フリーランスを長く続けるには何が必要なのだろうか。

フリーでやっていくには, 努力。自分を磨く努力。営業の努力も必要。

組織人のキャリアはたてに積み上がる。組織人であるならば30年というキャリアを積み上げれば管理

職になり、なかには組織の要職につくものもいるだろう。

そもそも「個人」として語る「ラジオの話者」という役割には組織内の地位など無関係である。組織人としての評価と専門職としての評価は異なるのが常であり、組織内の専門職従事者たちはそうしたジレンマを抱えがちである。かつての人気アナウンサーが、管理職としてデスクワークで日々を送る例も少なくはない一方で、フリーランスは組織人としての「積み上げ」はないが、専門職としてのキャリアを積む。

Aさんは、聴取者に寄り添い、聴取者とともに年齢を重ねる。ラジオ・コミュニケーションの中核であるパーソナリティとして、その「メディア共同体」にいる人々をつないでいく。Aさんの職業キャリアは、彼女の人生のキャリアでもある。ライフキャリアとは「仕事を通して経験したこと、経験することの積み重ねであり、生涯を通しての生き方」(江頭説子, 2009)である。

Aさんが積み上げてきたもの、不断の努力によって獲得してきたキャリア。それは、ワークキャリアでもあり同時にライフキャリアでもあるのだ。

4 フリーアナウンサーの現代的課題 ライフキャリアの可能性

ライフキャリアの定義における「仕事」とは、これまで「仕えてきた事」、これから「仕える事」であり、「生きていくための活動であるとともに社会と関わるための活動」(江頭説子, 2009)である。

Aさんのライフキャリアはラジオをフィールドに積み重ねられており、それが評価され、本人の人生を実り多いものとしている。

Aさんのフリーアナウンサーとしてのキャリアは、企業に従属することなく、自由で自律した主体として積み重ねられており、継続してきたラジオの仕事に対して誇りをもち、達成感も高いことが読みとれた。収入の増減に対する不安もあったようであったが「自営労働」者としての長いキャリアからか、不満を感じているわけではないようであった。伝統的近代家族の中では男性が世帯の収入を担うが、Aさんは女性であることを逆に単身のための収入があればいいと考えていたようである。一方で、夫の扶養家族になる気はないという。

谷岡理香(2009)は、2008年におもに40代以上の女性フリーアナウンサーへのインタビュー調査を行っており、彼女たちは概ね仕事に対する満足度が高かったと報告している。アナウンサーの仕事のみで生計をたてているものもあれば、プロデュース業や講師などを兼務するなどその活動は多様だが、彼女たちはこれまでのキャリアを活かしつつ、職業キャリアおよびライフキャリアをデザインすることに成功している。谷岡は、近年の景気低迷によるアナウンサー(特に女性)の非正規化の増加傾向に警鐘を鳴らしつつも、そこに従来型の日本の雇用から、欧米のような独立した職能団体発足に発展するオルタナティブな可能性を見つけ、女性アナウンサーのポジティブな身分としての「フリーランス」であるスペシャリスト意識に期待を寄せてもいる。

「フリーランス」であるからこそ、「自分が何ものか」という問いに向きあわざるをえないのであり、そのことでスペシャリストであることへの矜持が培われるのではないだろうか。

最後に、フリーアナウンサーの現代的課題について述べておきたい。

Aさんはフリーランスであるが、彼女のキャリア形成期には女性アナウンサーを外部労働に頼らなければならないという時代的背景があった。外部労働者であるフリーアナウンサーにも仕事の機会が多くあり、経験を積み、内部労働者さながらに現場で教育を受けた。

あの時代だから、あの時代に育てられたから、今まで生き残れたんだと思う。今、ほったらかし。[制作者も] 何にもいわない。怒られることもないしね。

放送メディアの現場ではすでに従来型の現場教育（OJT）が機能しなくなっている。特に昨今の放送メディア制作環境の悪化は著しく、制作費の削減によって、現場の人材育成を困難していると制作会社トップの柏井信二（2010）は述べている。

経営合理化のため、制作の外注化が進んでいる。実際の制作現場である制作会社が疲弊しており、人材確保も困難になっているという。

そのような状況下で次世代の人材をいかに養成するかは、メディア産業の重い課題である。

Aさんも「あの時代 [80年代] だから育てられた」と振り返っている。実際、現在の放送メディア業界は、若いアナウンサーを育てようとしているだろうか。はなはだ疑問である。

アナウンサーを志望する人は高いモチベーションを持ち、努力する事をいとわない。しかしながら、アナウンサーとしての資質があったとしても経験が積みなければスキルはあがらない。スキルを成熟させ、蓄積させていくためには経験が必要である。正規社員として採用になったとしても、仕事が保証されるとは限らない。厳しい評価がなされるという点においては、正規もフリーランスも同じである。アナウンサーという専門性が問われる職業においては、その専門的業務における局アナとフリーランスの職域の境界はますます曖昧になりつつある。

現在、フリーランスで活躍する人の前歴として圧倒的に多いのは、元局アナである。地方局のアナウンサーとして経験を積み、即戦力として採用される。

谷岡（2009）の調査によれば、キー局の地上波ではフリーアナウンサーの仕事が減少し、CSでは増加傾向にある。また、経営的に困難な地方局やラジオ局では契約やフリーランスが採用されている例が多くみられるという。

即戦力が求められる時代においては、Aさんのように初職からフリーランスとして始めるというキャリア形成は困難である。スペシャリストとしてキャリア形成をしていくためには、経験を積み、一定のスキルを蓄積することが不可欠である。

技能が未熟なまま、労働市場に放り出され、非正規雇用として使い捨てられる末路となるのは、

まさに「非正規雇用者問題」となりかねない。

自由で自律した騎士であるフリーランスでいるためには、いかに熟練技能を獲得するかが課題であり、どこで、どのようにその技能を獲得するかの機会と戦略が必要であろう。

全国各地で、有名・無名の一定の技能を持ったフリーアナウンサーたちが地道に活躍している。

自営労働者である彼ら彼女らは、アナウンスメントという専門的スキルを基に、組織に服従することなく、キャリアを紡いでいる。

ワークライフバランス時代を迎え、男性も女性も共に、職業生活と私生活とのバランスをとって生きる社会、多様な働き方が選択できる社会の実現に向けて、方向転換がなされ始めた。これまでの男性的なキャリア形成のありよう、企業社会の組織の論理に基づくキャリア観から、男女を問わず、仕事も家庭も視野にいれたものへとシフトしつつある。

フリーランスのライフキャリアは、正社員として生きることのオルタナティブとして、働き方や生き方の多様性を担保する意味で、ワークライフバランス時代におけるひとつのモデルとなりうるポテンシャルを秘めているのではないだろうか。

筆者は、フリーランスの収入の多寡を不問にする気は毛頭ない。専門的スキルがあるにもかかわらず、非正規だという身分ゆえに労働環境が悪化する現状は、今後も問題化していきたい¹³⁾。また、個人のエンプロイアビリティが過剰に要求される風潮に対しても強い違和感を持っている。以上の点をふまえ、今後の課題とし、稿を改めて論じる事としたい。

文献

- 青島祐子, 2004. 女性が活躍できる職場をつくる－意欲と能力のある女性社員の活用. 企業と人材, Vol. 37, No832. 産労総合研究所, 44-48.
- _____, 2007. 新版 女性のキャリアデザイン－働き方・生き方の選択. 学文社, pp50-51.
- _____, 2009. キャリア理論の現在－キャリア概念の理解を中心に. In: 東京女子大学女性学研究所 矢澤澄子・岡村清子編, 女性とライフキャリア. 勁草書房, pp3-39.
- 江頭説子, 2009. キャリアについて主体的に考える－職業キャリアからライフキャリアへ. In: 東京女子大学女性学研究所 矢澤澄子・岡村清子編, 女性とライフキャリア. 勁草書房, pp40-74.
- 藤田真文, 2009. アナウンサーの役割モデルを再構築せよ. GALAC 141号. 放送批評懇談会, pp 36-37.
- 林香里, 2008. メディア産業の「フリーランス」労働. 世界 2008年12月号. 岩波書店, pp134-144.
- 柏井信二, 2010. 製作会社が抱える人材育成に悩み. GALAC 162号. 放送批評懇談会, pp22-25.
- 北健一, 2008. メディア企業の中のフリーランス「正規と非正規」の壁を超えて. 経済11月号. 新日本出版社, pp23-26.
- 北出真紀恵, 2002a. 地域をつなぐ「声」－音響メディアにおける「声」とジェンダーの変遷. 年報人間科学 第23号. 大阪大学大学院人間科学研究科, pp339-357.
- _____, 2002b. ラジオにおける女性パーソナリティの役割－女性ラジオパーソナリティへのインタビュー

- から、マス・コミュニケーション研究第61号、日本マス・コミュニケーション学会、pp134-145.
- _____, 2007. “声”のプロフェッショナルアナウンサーの職能の変遷. 東海学園大学紀要第13号, pp53-70.
- _____, 2008. ラジオ・コミュニケーション再考—“声”（ラジオの話者）を中心に、マス・コミュニケーション研究第74号、日本マス・コミュニケーション学会、pp45-64.
- 桜井厚, 2002. インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方. せりか書房. pp58-62.
- 鈴木健司, 2007a. アナウンサー（局アナ）は「タレント」か「専門職」か. 新・調査情報67号. pp24-27.
- _____, 2007b. “フリー”アナウンサー隆盛の構図. 新・調査情報68号, pp24-28.
- 谷岡理香, 2009. 女性アナウンサーのキャリア形成についての一考察. 東海大学紀要文学部, pp37-77.
- 三宅正治インタビュー, 2007. 新・調査情報67号, pp28-31.
- 宇田忠司, 2009. フリーランスの言説スペクトル—英雄・騎士・従僕. 経済学研究59(3). 北海道大学, pp215-224.

- 1) 北健一（2008）は出版業界のフリーランスの実情についての報告と出版労連による正規・非正規・フリーといった格差の是正に向けての活動について報告し、林香里（2008）はフリーランスのジャーナリストたちの待遇や処遇の問題を論じている。
- 2) フジテレビアナウンサー三宅正治の発言。
- 3) 桜井厚（2002）はライフストーリーには「ストーリー」と表現される特有の局面に注目している。つまり、ストーリーが語られるのには、語り手だけではなく聞き手の言語的相互行為によって語られ、そのストーリーを通して自己や現実が構築される。方法論的には、ライフストーリーは調査者を「神の目」の位置におくのに対して、ライフストーリーは調査者の存在を語り手と同じ位置におくことだが両者を分かつ点であると述べている。
- 4) 宇田（2009）は、フリーランスをめぐる各言説において、その言説以外の側面は巧みに覆い隠される傾向があることを指摘し、考察を通じて見いだされた権力関係に研究者自身も不可避免的に荷担していることに注意を促している。そして、理論的含意を踏まえてどのようにフリーランスの実践をとらえるかといえ、
「現場の声に徹底的に依拠することで彼らの実践を捉えようとする」ことであると述べている。
- 5) 林（2008）の調査によれば、インタビューしたフリーランスたちの多くが「自営労働」に準ずる働き方をしており、免許制度を通して職能や地位が保護される伝統的プロフェッショナルに対してスキルを市場原理に委ねざるをえなく、正規雇用者たちの職業人生と異なるライフコースを辿っていることを報告している。彼らは性別役割分業に基づく近代家族のライフスタイルを追求しない。今後ますます「自営業」者が増加する事が予想されているのに、待遇改善の道のは遠いと言わざるをえないのが現状であるが、フリーランスの労働環境についての議論は稿を改めることにしたい。
- 6) アナウンサーの職能の変遷については、北出（2007）を参照されたい。
- 7) 詳しくは、北出（2002a）を参照されたい。
- 8) Aさんは現在、大阪と京都でラジオのレギュラー番組がある。放送局勤務の夫と要介護者の義母と3人暮らし。Aさんのインタビュー調査は2010年10月17日に奈良市学園前にて行われた。（所要時間：約

2時間半) Aさんは関西地方を代表するフリーアナウンサーのおひとりである。ますますのご活躍を心からお祈りしたい。

- 9) Aさんは17期生、筆者は23期生である。「共通語の基礎」「スタジオ実習」「レポート実習」など実践的な科目が開講された。受講者は女性が多く、筆者が所属する23期生は23人のうち男性は3人であった。TTCは、東京、大阪について名古屋教室が2010年3月に閉校した。Aさんのライフストーリーにおける物語世界はフリーアナウンサーとしての経験をもつ筆者との相互行為の産物である。
- 10) 詳しくは、北出(2002b)を参照されたい。
- 11) 詳しくは、北出(2008)を参照されたい。
- 12) Aさんの年収は具体的には300万円から900万円とばらつきがある。
- 13) 実際、若年層のフリーランスたちは近代家族体制つまり固定的性別役割分業に基づくライフスタイルを選択していない(できない)。